

英語と日本語の記述述語

—— 言語タイプの違いから ——

加 藤 鉦 三・都 築 雅 子

1. はじめに

本稿の考察の対象である記述述語を次のように定義する。

(1) 「記述述語」の定義

文中のイベント参加者の状態を記述する，一次述語以外の述語

英語も日本語も次のように文中に記述述語を取ることができる。

(2) 太郎は裸で入ってきた

- (3) a. John entered nude.
 b. John entered naked.
 c. John appeared in kimono.
 d. John was born a hero.

Ishii (1983), McNulty (1988), Ike-uchi (2003), 竹沢 (2001) などの先行研究で記述述語として議論されてきたものは英語では AP (形容詞・過去分詞), PP, NP であり，日本語ではデ格である¹。さて，記述述語の分布がもし AP・PP・NP に限られているとしたら，それは奇妙なことであると言わざるを得ない。何故なら，それらは自然類を成さないからである。もし VP も記述述語となることを示すことができるとしたら，記述述語の分布はもはや VP が偶然の欠如 (accidental gap) ではなく，記述述語の取り得る範囲は自然類であると主張することができる。本稿の第一の目的は，従来分詞構文とされてきたものの中にも記述述語と考えるべきものがあり，それが偶然の欠如となっている VP を埋めるものである，ということを主張するところにある。

記述述語の分布については，日英語の違いも大きな問題となる。日本語ではデ格（と VP）しか記述述語として機能しないが，英語では AP, PP, NP（と VP）が可能である。この違いを説明することが本稿の第二の目的である。

記述述語としての VP が可能であるとして，その VP が記述の対象とするものは，英語では主語も目的語も可能だが，日本語では主語のみが可能である。この違いを説明することが本稿の第三の目的である。第二と第三の目的に対する解答は，日本語が膠着言語であり，英

¹ ただし NP に関しては制約がある。それに関する議論については都築 (2004) を参照。

語が分析言語であるという事実からのものになる予定である。

2. 英語の記述述語

2.1 記述述語

都築 (1992) は、英語の記述述語の特徴を次のようにまとめている。第一に、記述述語は主語または目的語の状態を記述する。(4)では記述述語 *drunk* が主語 John だけでなく、目的語 Mary の状態を記述しているという解釈が可能である²。

- (4) John took Mary home drunk. (John = drunk, Mary = drunk)

第二に、記述述語は個体述語 (individual-level predicate) であってはならず、場面述語 (stage-level predicate) でなければならない (cf. Carlson (1977))。

- (5) John came home *tall / ^{ok}drunk.

第三に、記述述語は語彙範疇の最大投射である AP, PP, NP でなければならない、IP であってはならない。(6 a) は記述述語が主語を持ち、(6 b) には *being* が現れているが、これらが現れるためには節構造を持たなければならない。(6 b) は非文ではないが、このように *being* が現れている場合には状態記述の意味は持たず、通常に分詞構文として理由等の意味を表していることに注意されたい。

- (6) a. *Mary came to the party, her friend dead drunk.
 b. Mary came to the party, being dead drunk / in a red dress.
 (*状態記述 / ok 理由)

第四に、記述述語は VP 内に位置し、否定文中では記述述語が否定の焦点となる。

- (7) a. Mary said that she would come to the party in a red dress, and in fact [come to the party in a red dress] she did. (VP 前置)
 b. Mary didn't come to the party dead drunk / in a red dress. In fact she came a bit drunk / in a black dress. (否定の焦点)

2.2 記述述語としての「分詞構文」

都築は前節のように英語の記述述語の特徴を確認した上で、これら全てが当てはまる一群の「分詞構文」が存在することを指摘している。それは、原因・条件・譲歩といったものではなく、「～しながら」の意味を持つものである。第一に、この種の「分詞構文」は、(8)に

² 目的語記述は常に可能であるわけではない。日本語・英語ともにこの問題は非常に興味深いものであるが、本稿ではこの問題には立ち入らず、別稿で論じることとした。

見るように、「意味上の主語」として主語だけでなく目的語をも取ることができる。これは(4)で見たように記述述語が目的語をも状態記述できることと平行的である。後で見るように、通常の分詞構文では、意味上の主語が主節の主語に限定されることに注意されたい。

- (8) John sent me home sobbing. (Ishii 1982) (John = sobbing, me = sobbing)

第二に、この種の「分詞構文」は、記述述語と同様に、場面述語でなければならない。

- (9) John came home *belonging to the party / ^{ok}singing her song.

第三に、この種の「分詞構文」は、主語を持つ独立分詞構文であってはならず、またアスペクト助動詞を持つこともできない。これらはこの種の「分詞構文」が節構造を持たないことを示しているが、この点でも記述述語と平行的である。なお、(10 b) は生起順序を表す通常の分詞構文としては適格であるが、「～しながら」の意味をもつこの種の「分詞構文」としては不適格である。

- (10) a. *John brought Mary home, their friend sobbing.
b. John brought Mary home, having sobbed. (*状態記述 / ok 生起順序)

第四に、記述述語と同様に、この種の「分詞構文」は VP 内に位置し、否定文中では「分詞構文」の部分が否定の焦点となる。

- (11) a. Mary said that she would come into the party room singing merrily, and in fact [come into the party room singing merrily] she did. (VP 前置)
b. Mary didn't come home singing merrily. In fact she came home completely silent and exhausted. (否定の焦点)

以上のように、「～しながら」の意味を持つ「分詞構文」は、記述述語と同様の振舞いを持つ。さて、上で英語の記述述語は AP, PP または NP であることを確認した。しかしこれは実は奇妙なことである。それは、AP, PP, NP は自然類を成さないからである。もし記述述語の取り得る範疇に VP を加えることができれば、その時には「英語の記述述語の範疇は語彙範疇である」という自然な観察を得ることができる。そこで、本稿では、今見た「～しながら」の意味を持つ「分詞構文」こそが、この偶然の欠如(accidental gap)である VP を埋めるものである、ということを主張したい。「～しながら」は、「～という動作中である」という主語または目的語の状態を表すものであるから、「～しながら」の「分詞構文」が記述述語であるという主張は、意味的にも整合性あるものであると思われる³。「～しながら」の「分詞構文」は記述述語である、という主張は、冒頭で掲げた本稿の第一の目的に回答するものである。

2.3 通常の分詞構文

都築は、この「～しながら」の「分詞構文」と通常に分詞構文との対比についても確認している。なお、ここで言う通常に分詞構文とは、継起・理由・条件・譲歩等の、「～しながら」以外の意味を持つ副詞節的な分詞構文を指す。

第一に、通常に分詞構文では、V-ing の意味上の主語は常に主節の主語に限定される。また、いわゆる独立分詞構文として、分詞構文自体が明示的に主語を持つことができる。

- (12) a. John sent Mary to the hospital, accepting Mom's advice. (継起／理由)
 (ok "John accepted the advice", * "Mary accepted the advice")
 b. Protocol having been satisfied, and the visit being an extremely brief one, the large party proceeded to squeeze the small party out of all proportion to his popular vote. (Kortmann (1991))

第二に、通常に分詞構文では場面述語だけではなく個体述語が現れる。

- (13) Being tall, he can reach the ceiling.

第三に、通常に分詞構文は VP ではなく節構造を持つ。(14)では節構造がなければ現れないはずの虚辞主語が現れており、(14 a) では更に「～しながら」では現れない being が現れている。

- (14) a. There being no possibility in her present job, Linda is determined to leave.
 b. It at least appearing that John knows economics well, we should nominate him.

第四に、主節が否定文である場合、通常に分詞構文はその否定の焦点とはならない。(15)では証人はその証拠の重要性を知っていることは否定されておらず、逆に知っているから家にいたくないのである。

- (15) The witness didn't prefer to stay at home, knowing the importance of his evidence.

以上のように、通常に分詞構文と「～しながら」の「分詞構文」は非常に振舞いが違っている。このことは、「～しながら」の「分詞構文」が実は記述述語であって分詞構文ではない、という本稿の主張を補強するものであると考えられる。

³ 中国語では、日本語の記述述語を導くデにあたる語は「着」である。この語は、その直前に動詞を取る。後で主張するように、日本語の記述述語は「名詞+デ」と、「分詞構文」である「V して」の二つから成るが、「着」はこの二つを「分詞構文」の形で包含するものであるように思われる。更に、「着」は他の環境では進行相マーカーとして機能するが、それは英語の「分詞構文」に現れる-ing と平行的である。このように「着」は非常に興味深い語であるが、その分析は別稿に機会を譲ることとしたい。

3. 日本語の記述述語

3.1 助詞デ

日本語の記述述語は、デによって導かれるものが典型的なものであるとされている（菊池（1991）、竹沢（2001）等）。しかし、デによって導かれる全ての表現が記述述語として機能するわけではない。例えば、（16 a）は少なくとも（16 b）と（16 c）の二通りの解釈が可能である。

- (16) a. 太郎は車椅子で入ってきた
 b. 「車椅子という手段を使って入ってきた」
 c. 「車椅子に乗っているという状態で入ってきた」

本稿での記述述語の定義(1)に合う解釈は（16 c）のものである。

(1) 「記述述語」の定義

文中のイベント参加者の状態を記述する、一次述語以外の述語

助詞デの多義性により、デ格はさまざまな解釈を許す。考察の対象を(1)の定義に合うのみに限定するため、以下本稿では次の(17)のテストを満たすものだけを扱うことにする。

(17) 日本語の記述述語のテスト

「～（の）まま」か「～しながら」で、意味を変えずに言い換えることができる

例えば(2)は(18)のように意味を変えずに言い換えることができるため、下線部を記述述語と認定することができる。

- (2) 太郎は裸で入ってきた
 (18) 太郎は裸のまま（で）入ってきた

（19 a）は明らかに手段を表すデ格であるが、（19 b）は状態を表すものである。しかし（19 b）は容認されない。その（19 b）は、（19 c）のように「～のままで」を使って言い換えることはできない。これは(17)が記述述語のテストとして有効であることを示す事実である。

- (19) a. 太郎は沈黙で無罪を勝ち取った （手段）
 b. *太郎は沈黙で座っていた （状態）
 cf. 太郎は黙って座っていた
 c. *太郎は沈黙のままで座っていた

なお、(19b) はデ格では容認できないが、「沈黙で」というデ格ではなく、「黙って」という動詞表現であるならば容認可能である。その「黙って」は、「黙ったまま」と言い換えることができる。2 節では英語の V-ing 形が記述述語であるという主張をしたが、それに相当する動詞テ形も同様に記述述語であるという主張を 3.3 節ですることになる。なお、動詞テ形も(17)のテストに合致する点に注目されたい。

3.2 形容詞ク形

(20) に見るように、英語では形容詞が記述述語として機能する。

- (20) a. John entered the room nude.
b. John entered the room naked.

一方、日本語では、(21) に見るように、形容詞を記述述語として用いることはできない。

- (21) a. 太郎は面白く部屋に入ってきた。
cf. 面白い仕方で部屋に入ってきた
b. 太郎は面白く挨拶した。
cf. 面白い仕方で挨拶した

(21) のそれぞれの文自体は非文ではない。形容詞ク形「面白く」は、それぞれ部屋への入り方、挨拶の仕方が面白い、という様態副詞の解釈ならば問題はないが、太郎が面白いという記述述語の解釈を持つことはない。端的に言って、日本語では英語と違って、形容詞が記述述語として機能することはない。これはなぜなのだろうか。

形容詞ク形自体が述部として機能することがないのならばこれは特に不思議なことではない。しかし、例えば「窓を広く開ける」では形容詞ク形が結果述語、すなわち二次述語として機能している。また、「部屋が広く見える」のような小節では、形容詞ク形は小節内の一次述語として機能している。このように、形容詞ク形は環境によっては（一次または二次）述語として機能する。しかしク形は結果述語や小節を許す環境以外では、例えば「広く公募する」のように様態副詞としてしか解釈されない。さて、形容詞が「広い部屋」のような限定用法や、「部屋が広い」のような通常の一次述語用法で用いられる場合以外でク形になるのは、日本語が膠着言語であるからであると考えられる。膠着言語では、間投詞等を除けば、全ての句の主要部が動詞への接続形を取らなければならない。形容詞が記述述語の位置でク形を取らなければならない理由は、日本語が膠着言語であるということにある。ク形が動詞への接続形であるということは、全ての動詞ク形は、動詞への修飾形であるという意味において統語的には副詞として認可されているということを意味する。その意味において、ク形は意味的にも様態副詞として機能する方が自然であると考えられる⁴。

一方、英語は分析言語であるため、記述述語の位置に現れる形容詞は特に動詞への接続形を取ることを要求されない。更に、英語では形容詞に -ly をつけて副詞とするという語形成

規則がある。よって、英語では記述述語の位置にある形容詞が強制的に様態副詞としての解釈を受ける、ということはない。形容詞+ly という副詞形が存在するためである。これは一種の阻止 (blocking) 現象⁵であると考えられる。

以上の議論をまとめると(22)のようになる。

(22) 記述述語としての形容詞

日本語：膠着言語であるため接続形が要求されるが、接続形であるク形は（結果構文と小節以外では）様態副詞の解釈が課されるため、記述述語として用いられることはない

英語：分析言語であるため接続形は要求されず、かつ副詞は別形であるため記述述語としての形容詞が様態副詞の解釈を強要されることはない

形容詞が記述述語として用いられるかどうかは言語タイプが決定する、というのが本稿の主張であり、これは冒頭で提起した第二の問題、すなわち、「日本語ではデ格（と VP）しか記述述語として機能しないが、英語では AP, PP, NP（と VP）が可能である。この違いを説明することが本稿の第二の目的である」に対する回答でもある。AP については今見たばかりである。NP については、AP と同じ事情がある。日本語は膠着言語であるため、NP が NP のままで文中に現れることはなく、NP を動詞への接続形とする助詞とともに現れる。記述述語で用いられる助詞はデ、つまり前置詞である。よって、記述述語は NP ではなく、PP であるデ形として用いられることになる。

本節での主張は、すぐ上で述べたように、形容詞が記述述語として用いられるかどうかは言語タイプが決定する、というものである。もしこれが正しいとすると、日本語以外での膠着言語では形容詞が記述述語として用いられず、また英語以外の分析言語では英語と同様に形容詞が可能である、という予測をする。この検証は幅広い研究を待たなければならないのはもちろんであるが、少なくとも韓国語とフランス語・ドイツ語においては予測通りであることがわかっている。膠着語である韓国語では、(23)のように名詞+助詞による記述述語は可能であるが、(24)のように形容詞を用いると、その形容詞（連用形）は記述述語としては解釈不可能であり、日本語と同様に様態副詞の解釈しか許されない⁶。

⁴ よって、説明すべきは、(21)のような記述述語の現れる環境でなぜク形が様態副詞の解釈を強要されるかではなく、「広く開ける」のような結果述語の用法と、「広く見える」のような小節で、なぜ述部として機能しているのかであるように思われる。

小節は、節でありながら独立した節としての境界を持たないものであるため、ECM 効果として動詞への接続形を取らざるを得ないのであると考えられる。すると残るのは結果述語としての形容詞ク形である。本節では結果述語としての形容詞を先行研究に従って述部であるとしてきた。しかし日本語の結果述語の形容詞は、ある面では英語より生産性が高く、ある面では英語より生産性が低い。これは結果述語としての形容詞が実は形容詞ではなく副詞として機能しており、その帰結として日本語では少なくとも形容詞に関する限り結果「述語」ではないことから来ていると考えられる節がある。これは非常に興味深い問題であるが、紙幅の都合から別の機会に論じることとしたい。

⁵ cf. Aronoff (1976).

⁶ 例文とその解釈は延鎮淑氏の提供による。

- (23) hanakoneun almom-euro teureowatta
花子は 裸デ 入ってきた
- (24) a. hanakoga yeppeuge teureowatta
花子が 美しく 入ってきた
b. hanakoneun jaemiitke malhaetta
花子は 面白く 話した

一方、英語と同じく分析言語であるフランス語とドイツ語では、英語と同様に形容詞を記述述語として用いることができる⁷。

- (25) a. Jan est entre dans la chambre tout nu.
John is entered into the room stark nude
'John entered the room stark nude'
b. Johannes trat nackt ins Zimmer.
John entered nude into-the room
'John entered the room nude'

3.3 動詞テ形

本稿の2節で、英語で「～しながら」の意味を持つ「分詞構文」は、VP という形態の記述述語であると主張した。3.1 でも少し触れたように、日本語のある種の動詞テ形は英語のVP に相当する記述述語であると考えられる。例えば、(26)の動詞テ形は、今まで見てきた名詞+デと同様に文中のNPの状態を表している。

- (26) a. 太郎は黙って入ってきた
b. 花子は編み物をして待っていた

(26)の下線部が記述述語であることは、3.1節で提案した記述述語テスト(17)で確かめることができる。(26)の下線部は、(27)のように、「～のままで」あるいは「～しながら」で言い換えても意味が変わらない。

(17) 日本語の記述述語のテスト

「～(の) まま」か「～しながら」で、意味を変えずに言い換えることができる

- (27) a. 太郎は黙ったまま入ってきた
b. 花子は編み物をしながら待っていた

一方、状態ではなく手段を表すテ形は、(29)のように「～のままで」あるいは「～しながら」で言い換えることはできない。

⁷ フランス語とドイツ語の例文はそれぞれ吉田正明氏と須澤通氏の提供による。

- (28) a. 太郎は走ってやせた (手段)
 b. *太郎は走ったまま／走りながらやせた
- (29) a. 花子は編み物をして生活費を稼いだ (手段)
 b. *花子は編み物をしたまま／しながら生活費を稼いだ

ここで動詞テ形の意味を考えておこう。(30)はテ形の主な用法である。

- (30) 動詞テ形の用法
- a. 歩いて逃げる (手段)
 - b. 転んで泣く (原因)
 - c. 歌って踊れる歌手 (並列)
 - d. 年が明けて新年になる (継起)
 - e. 太郎が走って次郎が逃げる／次郎が逃げて三郎が喜ぶ (文接続)
 - f. やってやる, もらってくれる (補助動詞に接続)

テ形のテは動詞の連用語尾である。そのようなものに語彙的な意味があるとは到底考えられない。しかしテ形には(30)のようにさまざまな意味があるように見える。これはどのように考えたらよいのだろうか。

(30)の諸用法から気づくことは、英語の分詞構文との類似性である。さて、分詞構文とは、接続詞を用いなくて節を節につなげる構文である。ここで注意したいのは、分詞構文が接続詞を用いなくても「理由」「継起」等の意味を持つとされている点である。動詞の ing 語尾にそのような意味があるはずはないため、そのような意味は、二つの節の表す事象間の関係を聞き手が読み込んでいるに過ぎないと考えるべきであろう。動詞の ing 語尾の果たしている機能は、それを含む節が非定形であり、よって従属節である、ということを示すというものであろう。

(30)のさまざまな「意味」も、英語の分詞構文と同様に、テによってつながれる二つの節間の関係を、聞き手が読み込んでいるに過ぎないものと考えられる。テ自体に(30)のさまざまな意味があるのではないのである。

しかし、動詞テ形には分詞構文にない用法がある。それは(30)cの「並列」である⁸。更に言えば、動詞テ形の基本的用法がこの「並列」であると考えられる。(30)で(f)以外の用法は、全てこの「並列」という用法と言って差し支えないものである。それは、(f)以外の例を英語では全て and を使って訳すことができることで確認できる⁹。ただし、ここで言う「並列」がテ形の意味であるという主張をしているのではない。テ形は(30c)のように統語的に等位接続するのが基本的な機能であるという主張をしているのである。テ形はA and (B)であ

⁸ 一方、テ形になくて分詞構文にある用法は、Weather permitting のような「条件」である。この違いは、テ形の基本的用法が等位接続であるのに対し、分詞構文ではその「並列」の意味さえもなく、分詞構文ではただ二つの事象を（一方を非定形にすることによって）接続することなく並べているだけであるところから来るものと考えられる。

⁹ (30)fの補助動詞接続も、元来は動詞並列であったのであろう。

り、(30)のさまざまな「意味」は、AとBの関係から含意されるものである。

以上の議論をまとめると(31)のようになる。

(31) 動詞テ形の機能

動詞テ形は接続形であり、その機能は等位接続である

さて、記述述語としてのテ形は主動詞に接続している。よって、記述述語としてのテ形は主動詞への等位接続である。このことを念頭において、動詞による記述述語の日英間の違いを見てみよう。

(5) John sent me home sobbing. (Ishii 1982) (John = sobbing, me = sobbing)

(32) 太郎は花子を泣いて家に送り出した (太郎=泣いている, *花子=泣いている)

英語の動詞による記述述語は、(5)で見たように、ある条件を満たせば、主語だけでなく目的語の状態記述も可能である。しかし日本語では、(32)のように同じ条件の下でも、主語に対する状態記述はできるが、目的語を状態記述することはできない。これはなぜなのであろうか。

上で見たように、日本語のテ形は等位接続形であり、記述述語の環境では主動詞への等位接続である。主動詞との等位接続であるため、主動詞と主語を共有する。これは英語で言えば例えば John took a shower and went to bed のような文で、and でつながれた VP が接続先の VP と主語を共有するのと同じ状況である。そうすると、テ形の「意味上の主語」、すなわち状態記述の対象は、主動詞の主語、つまり文全体の主語である。そのため、テ形が目的語を状態記述の対象とすることは原理上あり得ないことになる。

一方英語では、動詞による記述述語は「～しながら」の意味の分詞構文 V-ing である。この V-ing はテ形と違って接続形ではなく、ただの非定形である。そしておそらく接続形ではないという理由により、等位接続でもない。それ故、V-ing は主動詞へ等位接続してはいない。よって V-ing はその「意味上の主語」を主節動詞と共有する必要はなく、そのため目的語をその「意味上の主語」、すなわち状態記述の対象としてもかまわない。

以上の議論をまとめると(33)のようになる。

(33) 日英語の動詞による記述述語の違い

テ形：動詞への等位接続形

- テ形は主動詞への等位接続
- テ形の意味上の主語は主動詞の主語
- 目的語を意味上の主語とすることはない

V-ing：非定形ではあるが等位接続形ではない

- V-ing の意味上の主語は主動詞の主語である必要はない
- 目的語を意味上の主語とすることができる

これが本稿の冒頭で掲げた第三の問題、「VP が記述の対象とするものは、英語では主語も目的語も可能だが、日本語では主語のみが可能である。この違いを説明することが本稿の第三の目的である」に対する回答である。

以上、動詞による記述述語の振る舞いの違いは、それが主（節）動詞への接続形であるかどうかによるという議論を進めてきた。日本語のそれが接続形でなければならないのは、3.2 節で見たように、日本語が膠着言語であるからである。英語のそれが接続形でないのは、英語が分析言語であるからである。このように、3.2 節での形容詞ク形に関する議論と、本節での議論は、全く同じ結論となった。

最後に、本節で議論した現象を、日本語と同じく膠着言語である韓国語において観察してみよう。もし韓国語においても日本語と同じように、動詞による記述述語の目的語記述が不可能であれば、それは本節での議論に対して支持を与えることになる。

韓国語では、日本語と同じように、名詞+デ（に相当するもの）による記述述語は、主語だけでなく目的語を状態記述することができる。

- (34) taroneun hanakoreul almom-euro pyeongwone teryeogatta
 太郎は 花子を 裸で 病院に 連れて行った
 （韓日とも、ok 太郎＝裸，ok 花子＝裸）

一方、(35)のように、日本語のテ形に相当する動詞連用形の場合には、主語記述は可能であるが、目的語記述は日本語同様不可能である。更に、韓国語の動詞連用形の用法は、ほとんど日本語の(30)と重なることも、本節での分析を支持する事実であると言えよう¹⁰。

- (35) taroga hanakoreul aegataseo pyeongwone teryeogatta
 太郎が 花子を 焦って 病院に 連れて行った
 （韓日とも、ok 太郎＝焦っている，*花子＝焦っている）

4. 結 論

以上の議論で、本稿では次の3点を主張した。

1. 「分詞構文」とされてきたものの一部は記述述語である
2. 日本語で形容詞による記述述語が許されないのは、日本語は膠着言語であるため接続形を取らざるを得ないことによるのであり、一方英語でそれが許されるのは、英語は分析言語であるため接続形が要求されないことによる。
3. 日本語で動詞テ形による目的語の状態記述が許されないのは、日本語は膠着言語であるため接続形を取らざるを得ず、必然的に主動詞への等位接続になるためであり、一方英語でそれが許されるのは、英語は分析言語であるため接続形であることが要求されないことによる。

¹⁰ 以上の韓国語の例文と情報は延鎮淑氏の提供による。

本稿では更に、日本語以外の膠着言語と英語以外の分析言語での若干の事実を見た。本稿は二次述語のうち、記述述語に関する事実を、言語タイプという観点から分析するということを試みた。この試みを意味あるものにするためには、日英両言語での記述述語・結果述語に関する言語事実の更なる発掘と、日英語以外での言語での状況に関する多大な研究が必要である。本稿はその研究の小さな一歩であるに過ぎない。

引用文献

- Aronoff, Mark (1976) *Word Formation in Generative Grammar*. Linguistic Inquiry Monograph 1. Cambridge, Mass. MIT Press.
- Carlson, G. N. (1977) *Reference to Kinds in English*. Unpublished doctoral dissertation, University of Massachusetts, Cambridge, Mass.
- Ike-uchi, Masayuki (2003) *Predication and Modification*. Liber Press: Tokyo.
- Ishii, Yasuo (1983) "Quasi-predicatives and related constructions in English." MA Thesis, Tokyo Gakugei University.
- 菊池 朗 (1991) 「日本語の二時述語」, 安井稔博士古稀記念論文集編集委員会編『現代英語学の歩み』, 212-20, 開拓社, 東京。
- Kortmann, B. (1991) *Free Adjuncts and Absolutes in English*. Routledge: London.
- McNulty, Elaine (1988) *The Syntax of Adjunct*. U.M.I. (University Microfilms International) Dissertation Information Service, Michigan: Ann Arbor.
- 竹沢幸一 (2001) 「日本語の状態記述二次述部と品詞分類 — 記述的考察を中心に」, 『筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究成果報告書」, 筑波大学「東西言語文化の類型論」特別研究プロジェクト, 筑波大学。
- 都築雅子 (2004) 「名詞句描写述語に関する一考察」, レキシグラム研究会での口頭発表。
- 都築雅子 (1992) 「分詞構文と二次述語」 日本英文学会中部支部シンポジウム口頭発表。